



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	HUSCAPレター 第10号 : 拝見します。「初めての論文」: 第7回 宮下弥生 大学院文学研究科助教 「F.K.Stanzel の語りの理論とその成果 : K.Mansfield, "The Garden Party" を例に」
Issue Date	2008-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88219
Type	journal
File Information	hletter10.pdf



北海道大学学術成果コレクション

HUSCAP レター

学術成果コレクション (HUSCAP) は、北海道大学の研究者や大学院生などが著した学術論文、学会発表資料、教育資料などを電子ファイルで保存し、WEB で公開するものです。誰でも、無料で読むことができます。



拝見します。 「初めての論文」(第7回)

宮下 弥生

大学院文学研究科・文学部助教

登場人物の視点から

こんな馬鹿げた企画なんて！一体どうしたらいいっていうの？彼女は上司から返ってきたメールを読んでいたので。

このような小説の始まり方は今日では物珍しくもないが、実は 20 世紀初めによく登場してきた手法だった。上の例では最初の二つの文は「彼女」が実際に話した言葉とも取れるという点で曖昧であるが、英語にしてみた場合、この手法の特徴はより明らかになる。

Such an absurd plan! How can she manage that? She was just reading an e-mail sent back from her boss.

今後、主人公になりそうな「彼女」の視点から最初の二つの文は呈示されている。"Such" と "absurd" は彼女が感じたままの言語表現であり、感嘆符、二文目の疑問文の形も彼女の認識を示すものとなっている。また、二文目で "she" と三人称で示される一方、彼女の認識の時点を示す "can" の現在形はさらに深い問題を含んでいる。最後の文は一転、彼女の視点を離れ、語り手が彼女を取り巻く状況を客観的に見て方向付ける働きをしている。

中世英文学から物語理論研究へ

私の英文学研究の出発点は G. Chaucer である。北海道大学での学部、大学院時代を通してその各作品について論じたが、指導教官の平善介先生は読者を煙に巻くチョーサーの語り口を物語理論をふまえて分析するよう勧めて下さった。Wayne C. Booth, *The Rhetoric of Fiction* を始めとする理論書を、さらに平先生の演習では F. K. Stanzel, *A Theory of Narrative* を丹念に読んだのだが、これが後に私の Shakespeare 研究の基盤になるとは当時は思いも寄らなかった。



グローブシアター（ロンドン、バンクサイド）『ベニスの商人』の上演前（2007年8月）

それを各登場人物の視点に還元してその意義を問う、これが私が物語理論の研究を通して授かったシェイクスピア劇研究の基盤となったのである。こうして "An Application of a Narrative Theory to *Romeo and Juliet*: Orientation and Manipulation of the Audience's Sympathy" は誕生した。この論文は HUSCAP でのダウンロードが 1954 件（2008 年 7 月現在）と、英米を始めとする各国で多くの人々に読ま

F. K. Stanzel の物語理論

シュタンツェルは語りの形態を、「私」が自分の話をするもの、第三者が物語世界を外側から見て話すもの、reflector の意識から物語世界を呈示するもの（冒頭で示した例の最初の二文）の三つに分けている。拙論「F. K. Stanzel の語りの理論とその成果—K. Mansfield, "The Garden Party" を例に」は、三つ目のパターンについて、これまでの理論の変遷とその問題点を分析し、シュタンツェルの理論の紹介をして、それを具体的に作品に当てはめその成果を検証するというものである。Reflector(冒頭の例では "she" にあたる)の視点から描く場合、情報はその狭い視野から見たものに限られ、その時その場で reflector の意識に登ったことのみが表現されているため、作品全体からみた意義については疑わしい。しかし、実際の作品では、その意義について語り手が客観的な立場から位置付けを行っている場合が多いのである。この点については次作「内面からの心理描写—マンスフィールドを例に」で論じた。

Shakespeare 研究へ

まさか自分がシェイクスピアで論文を書くことになるとは思ってもみなかった。何しろ英文学の分野では最も研究が進んでおり、困難ばかりが予想されたのだから。しかし…。

シェイクスピアの劇作品は登場人物の科白のみから成り立つ。つまり、私はこう思う、(別の)私はこう、その連続なのである。だが、語り手不在の劇作品にあっても何かしら全体からの位置付けができるしくみがどのシェイクスピア劇にも組み込まれている。登場人物の発話の連続体から劇全体の指標を洗い出し、さらに

れることになり自分でも不思議な気持ちである。また、この観点に行き着く前に書いた "Juliet's Acquisition of Independence and Patriarchy in *Romeo and Juliet*" も順調にダウンロードを重ねている。

この論点から書いた論文は執筆中のものも含めてまだ数編である。また、ロンドンやストラットフォード・アポン・エイボンでの観劇体験を経ることで、文字テキストであった劇作品が具体化されることも学び、実際の各上演を越えた抽象的な上演を想定して作品を分析する視野も必要だと感じるに至っている。さらにシェイクスピアの各作品の元となった材源との比較検討は、劇全体の指標を探る際に不可欠である。このような武器を手に、また、world wide web、世界中に張り巡らされたクモの巣状のインターネットを味方に、新たにシェイクスピア劇の分析を進めていきたい。シェイクスピア劇は常に読者／観客の新しい解釈に開かれている。どんな感動と喜びが私を待ち受けているのだろう。

最後になるが、中世の英語を丹念に読むことを教えて下さった葛西清蔵先生、私の英語を丁寧に直して下さいました Willie Jones 先生、拙論が世界で読まれることになる機会を作ってくれた HUSCAP 担当の方々にも深く感謝の意を表したい。

宮下先生の「初めての論文」

時崎, 弥生

F. K. Stanzel の語りの理論とその成果
— K. Mansfield, "The Garden Party" を例に —
『北海道大学文学部紀要』43 巻 3 号 1995 年 ; 75-95

この論文は、HUSCAP でご覧いただけます。